

ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「私たちのマンガ史」は、東京都江東区・森下文化センターにて2016年10月21日（金）から30日（日）の会期で開催しました、新つれづれ草マンガ展「私たちのマンガ史」で展示した展示物を再構成したものです。

私たちのマンガ史
マンガ家デビュー秘話

1970年代初頭、マンガ家になることを夢に見て、その夢に全力で向かっていったマンガ少年たちがいた！

マンガ家としてデビューしたのか？
それとも、しなかったのか？
パネル展示と当時の原画、掲載誌、資料等で今だから語れる、それぞれのマンガ史をご覧ください

手塚治虫の「マンガの描き方」
石森章太郎の「マンガ家入門」
雑誌COMの創刊、サンデー・マガジンの大ヒット
少年ジャンプ創刊、手塚賞・赤塚賞新人賞へ投稿……

イラスト：KINKAN

入場：無料

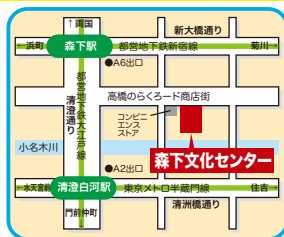
日時：10月21日（金）～10月30日（日）
午前9時より午後9時まで（最終日は午後5時まで）

会場：森下文化センター1F展示ロビー

お問合せ：森下文化センター

〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17
TEL03-5600-8666 FAX03-5600-8677
都営地下鉄新宿線・大江戸線「森下」駅A6出口より徒歩8分
都営大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅A2出口より徒歩8分
<http://www.kcf.or.jp/morishita/>

主催・新つれづれ草 共催・森下文化センター



■私たちのマンガ史

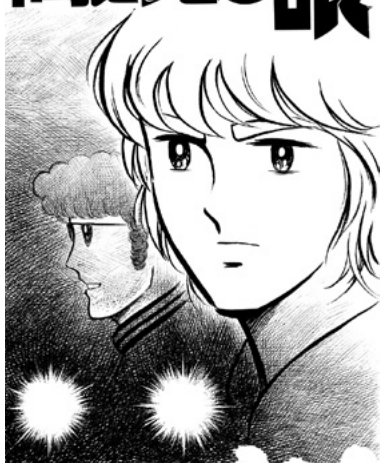
新宅よしみつ

デビュー作

『闇に光る眼』

1972年「少年マガジン増刊号」

闇に光る眼



そもそも漫画家になりたいと思ったのは、小学校の高学年から中学にかけてでした。当時、似顔絵を「少年画報」とか「冒険王」に描いて投稿して、百回ぐらい載りました。だんだん似顔絵だけでは飽き足らなくなってきた、自分でストーリーものを描いてみたいと思って、自分でコマ割りをし始めたのは中学3年のとき。手塚治虫さんや横山光輝さんの漫画で育ったようなものでしたから、SFっぽいものを描き始めたんです。当時、貝塚ひろしさんが主宰していた「まんがマニア」という会員向けの雑誌があつて、そこで掲載されたりして調子に乗ったというか（笑）。これなら東京に出て勉強すれば漫画家になれると。

それで行ったんですよ、東京。高校1年のときに一人だね。いろんな漫画家さんのところを

訪ねてサインもらったりして。それで井上智さんのところに行つたときに、将来漫画家になりたいんだったら、うちに来なさいと言つてもらつて。もういてもたつてもいられなくてね。高校を辞めて東京に行こうと。

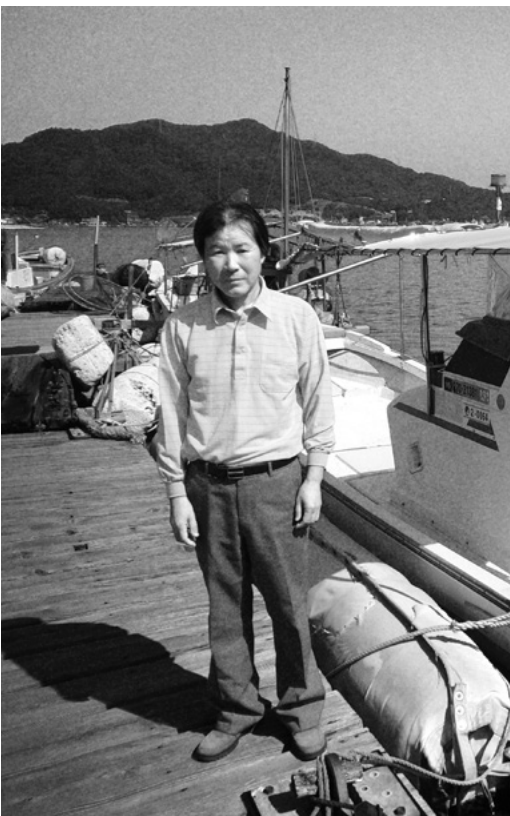
たつた一人で家を飛び出しましたけど、不思議と心細いとか不安だという気持ちはなかったですね。当時の漫画雑誌って週刊誌では「少年マガジン」と「少年サンデー」「少年キング」の3誌だけで、あと月刊誌で「少年ブック」や「冒険王」「まんが王」「少年画報」があつたぐらいじゃないですか。青年誌もなかったから、本当に一流の漫画家しか執筆できない時代でした。そうした漫画家のアシスタントになれるというだけで嬉しかった。

デビューしたのは、久松さんのところを辞めたあとです。実はそのあと、久松さんの連載がだんだん終わってしまい、このあたりが潮時かなという感じになりました。辞めてから自分で作品を描いてあちこち持ち込んでいたんですが、あまり芳しくなかったんです。なので、「少年ジャンプ」で『くじら大悟』を連載していた梅本さちおさんのアシスタントになりました。割と長くやりましたね。5年ぐらいかな。合間に自分で漫画を描いて投稿していたら、講談社で佳作に入って、「少年マガジン」の増刊号で1本オリジナルを描かせてもらいました。『闇に光る眼』という海洋冒険ものです。わくわくするようなものを描きたいと思っていたので、アクアラングを使って海の底を探検するよな漫画にしました。ただ、あまり人気投票で上位に行けなくてね。それ以上、描かせてもら

えなくなりました。時代に合わなかったというか、読者は冒険ものに興味が湧かなかったんでしょう。

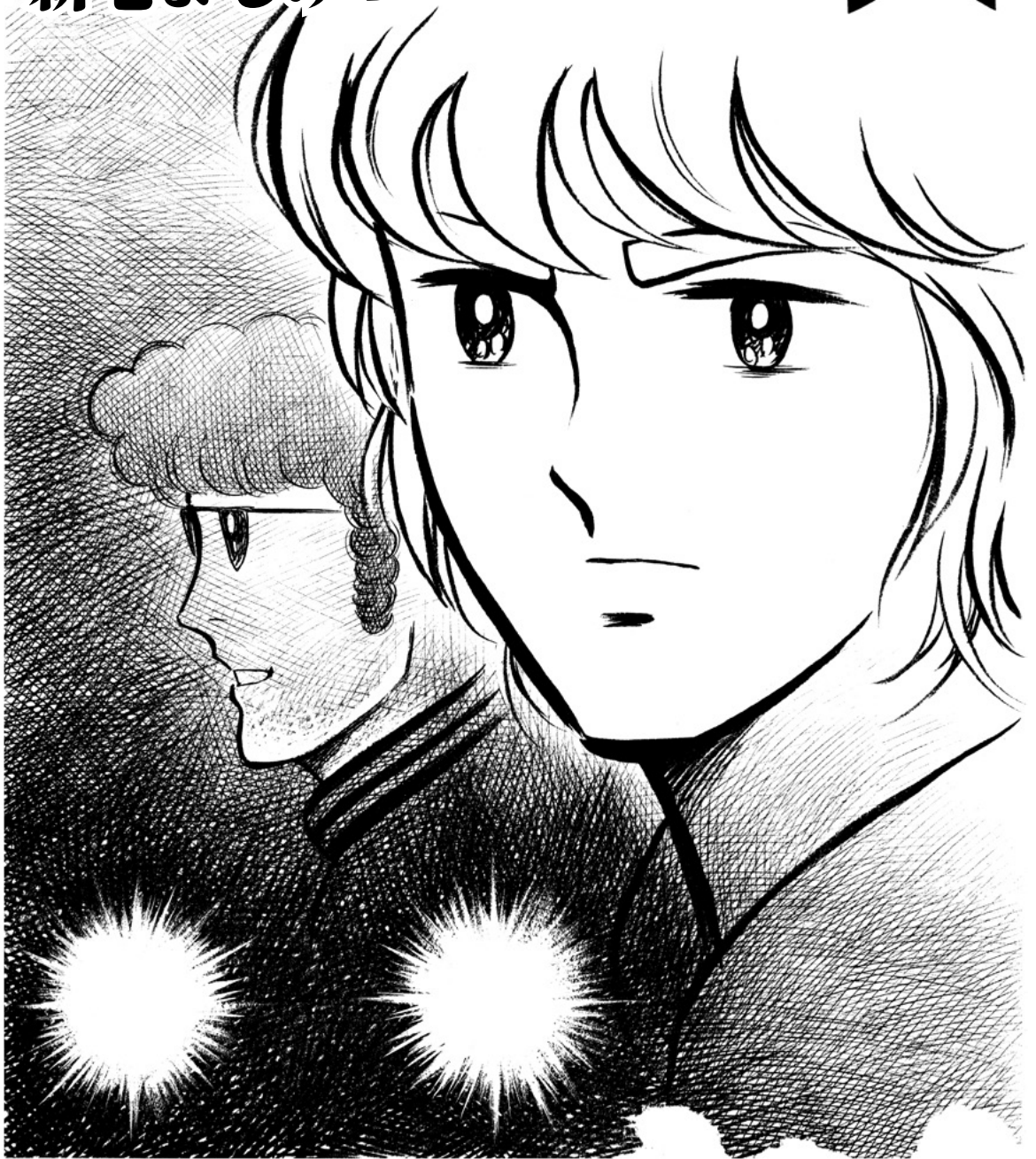
掲載原稿は、デビュー作の、『闇に光る眼』
1972年「少年マガジン増刊号」掲載。

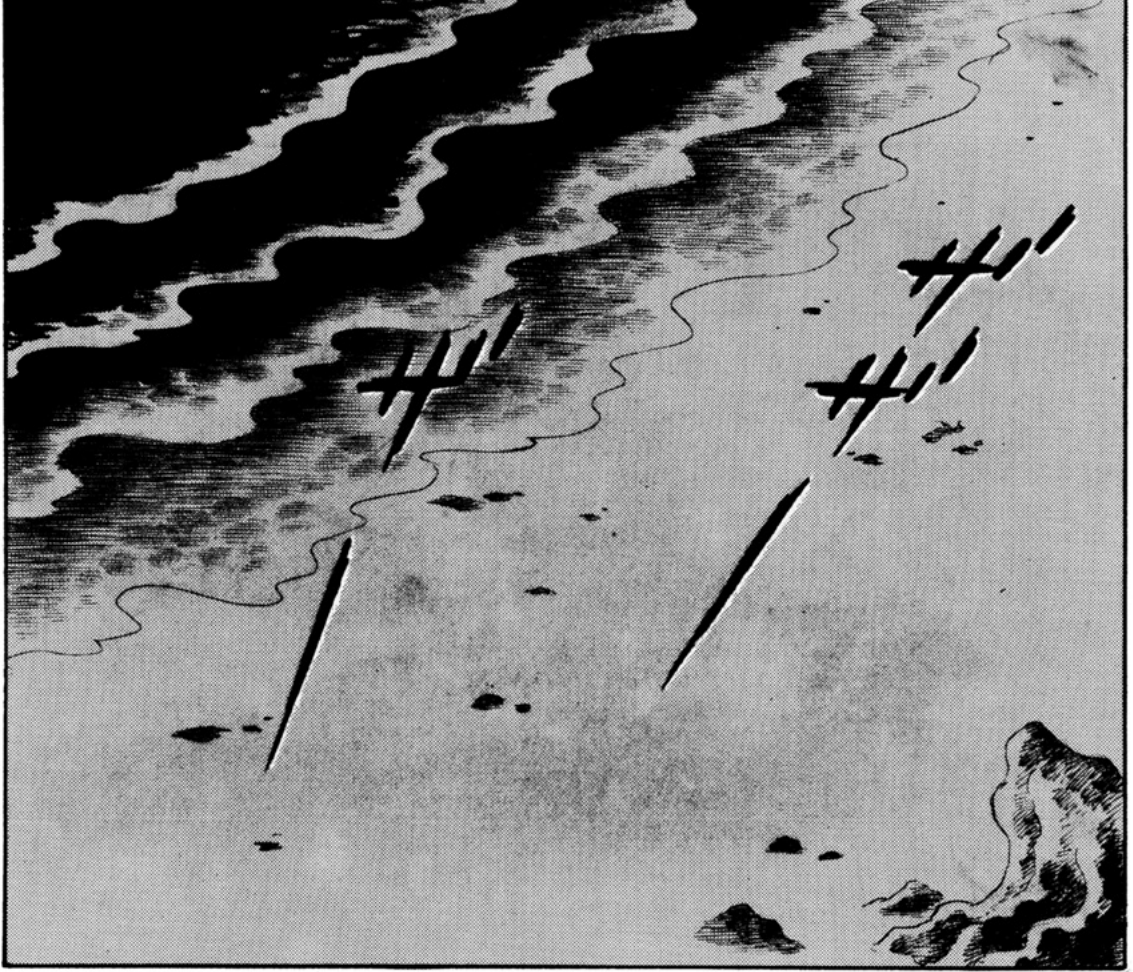
文・新つれづれ草第3号掲載「つれづれイン
デビューマンガびと」より抜粋加筆。



や み ひ か め
闇に光る眼

新宅よしみつ

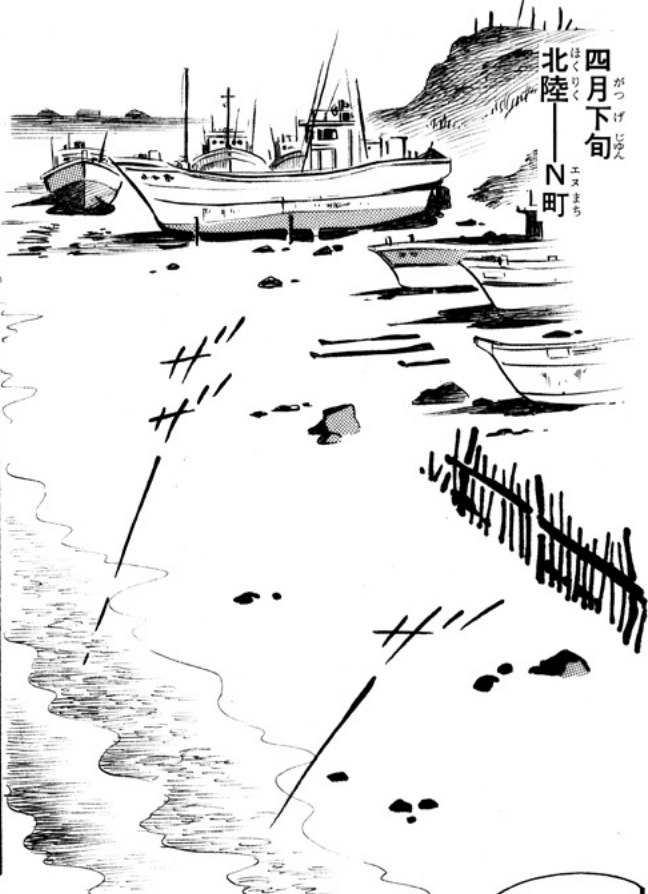








四月下旬
北陸
N町



先輩!
これでやっと
東京へ
かえれますネ

ここはどうも
静かすぎて……

六にや
ちよつと
健康的
すぎるよな



水中プロカメラマン
立波 勝

助手
大石 六郎

どういう
ことですか
それは?

まあ
まあ
深く
考えないの



絵馬が
かかって
るんスよ

先輩
ちよつと

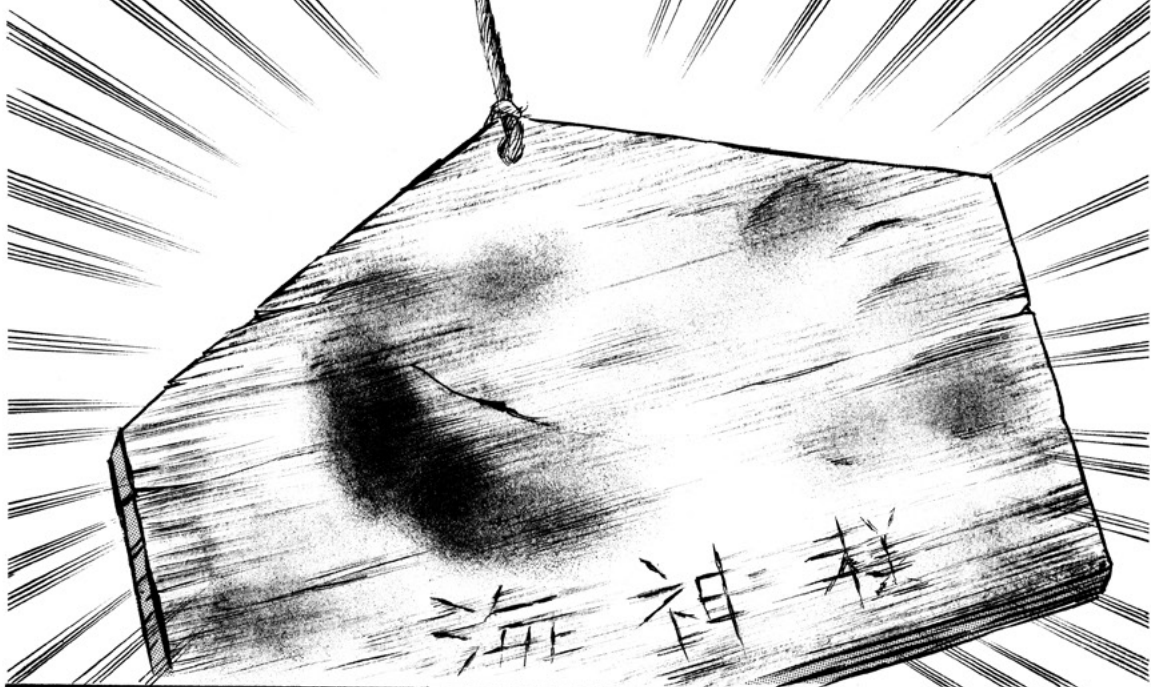
絵馬?



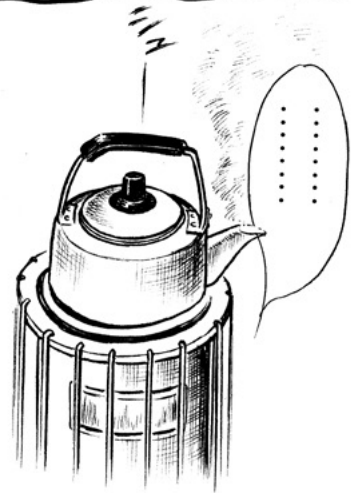
何をまつて
あるのかな?



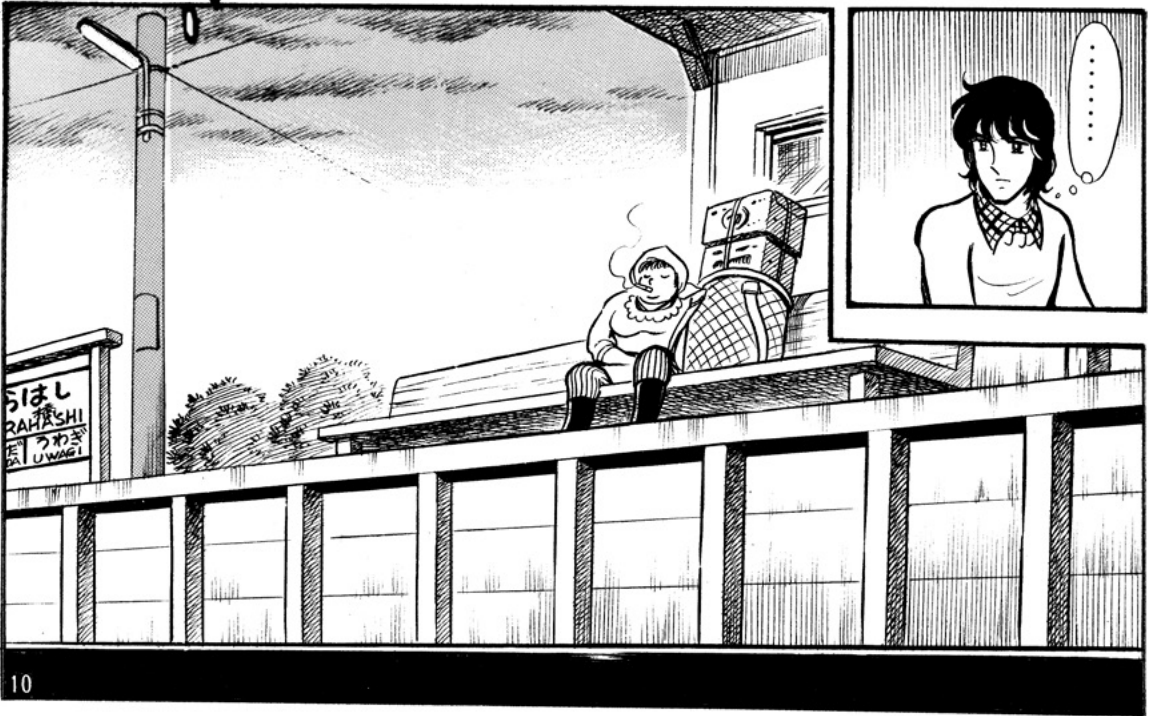
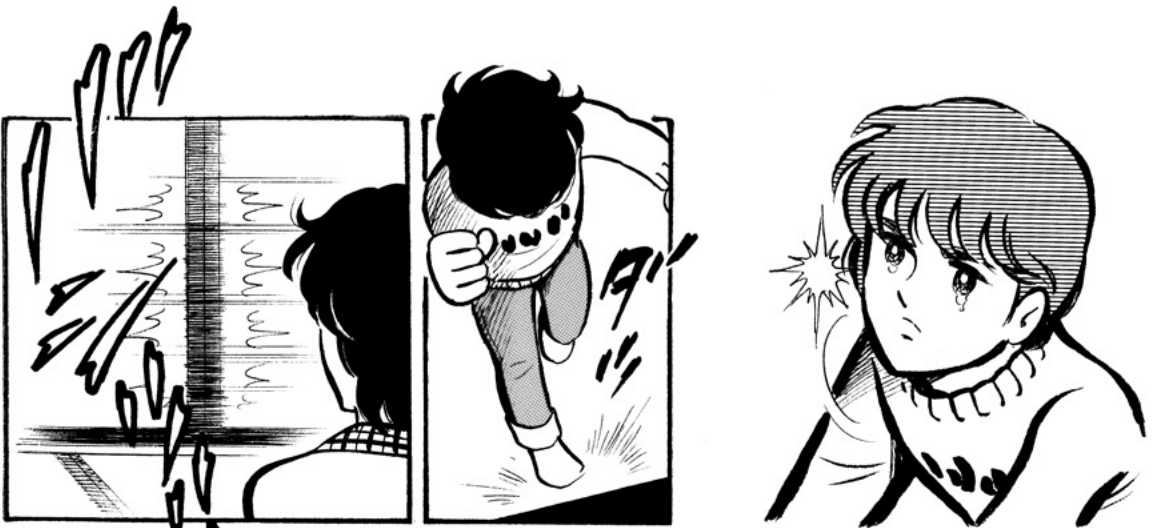
へえ~~~~
こんな所に
ほこらがある

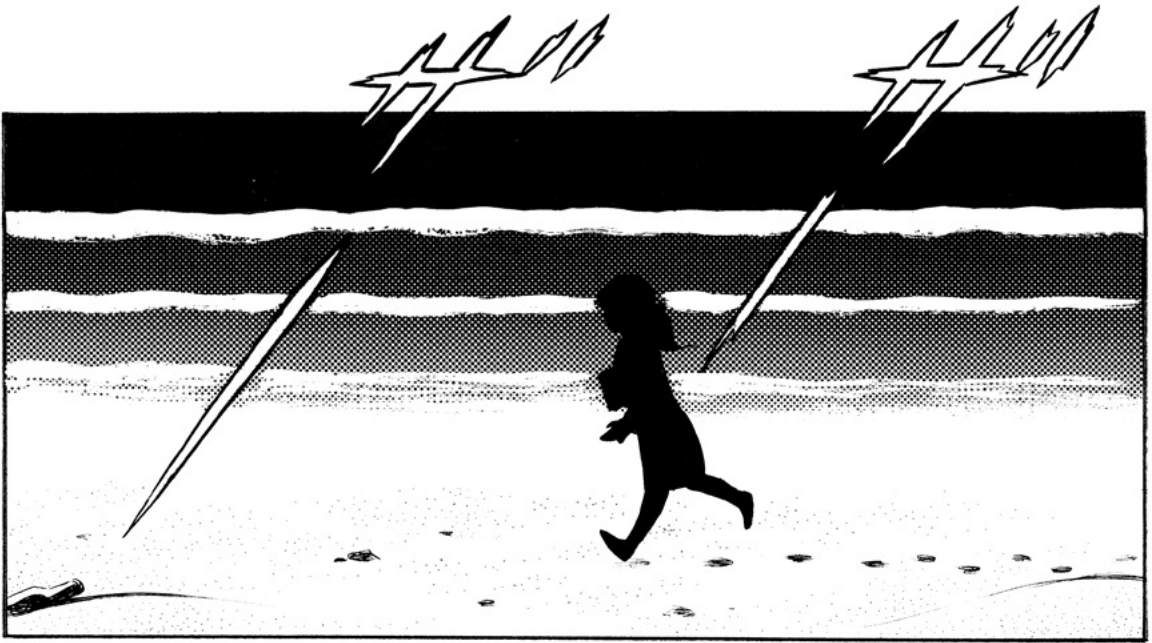












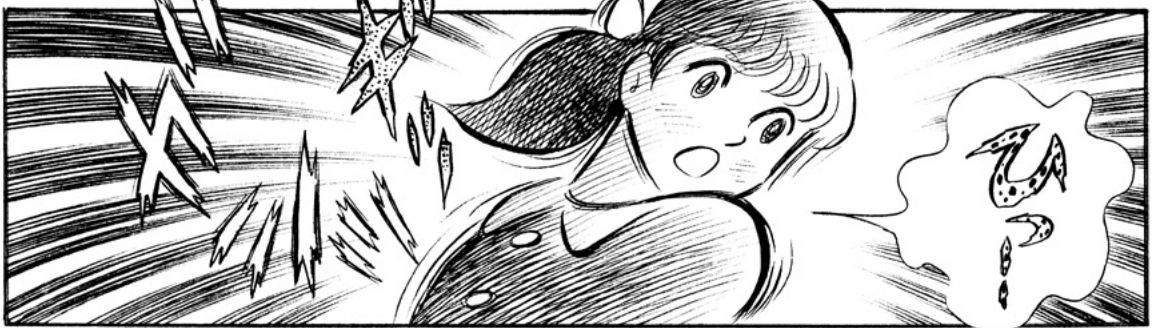
だいたい
 あいつが
 いけないんだ
 インベーター
 やろうなんて
 いいだすから……

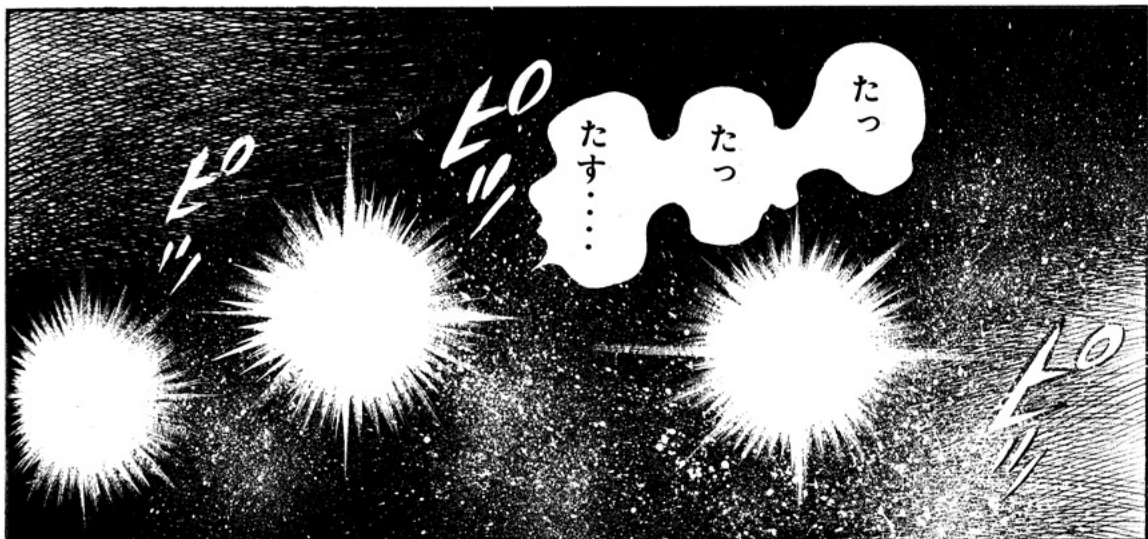


あ~~~~あ
 すっかり
 おそく
 なっちゃったわ



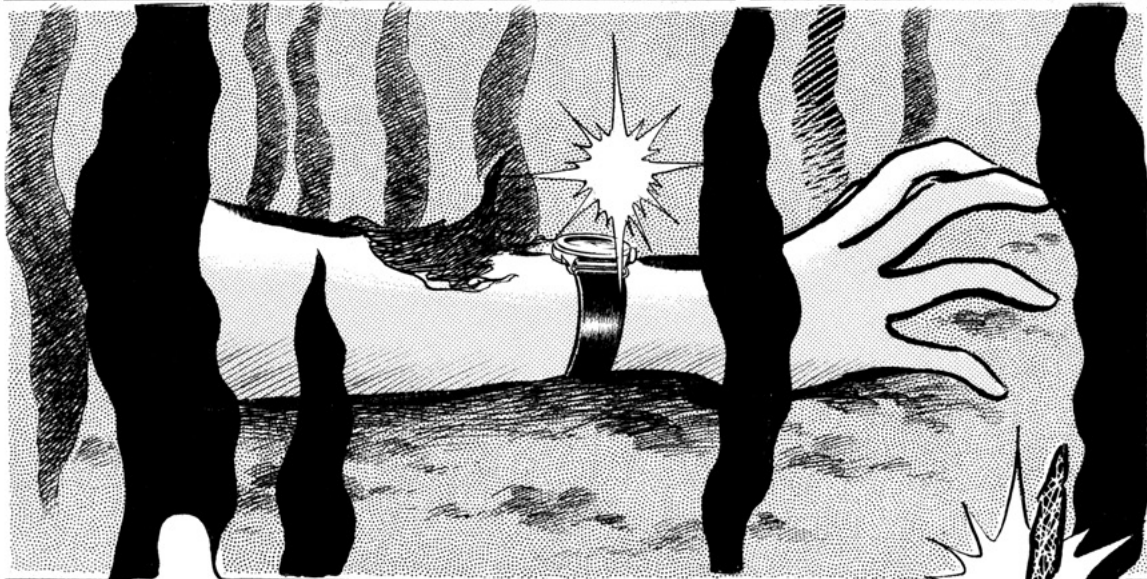
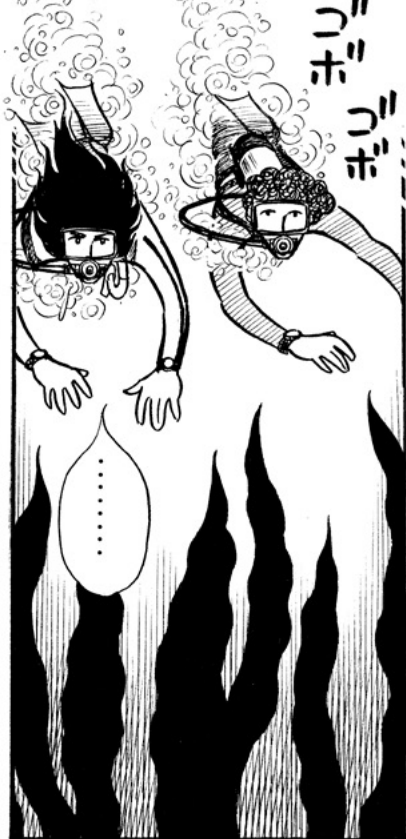
ん？

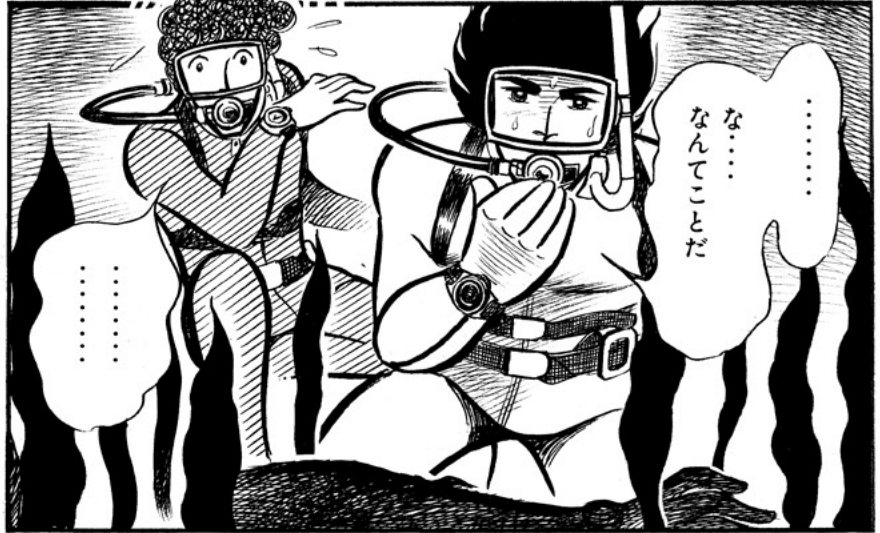
















あの海底の
悲惨なのを

おまえも
みただろう

だが...



六六
いいか

おれは
子どものいうことだと
それほど
しんじちやいなかった



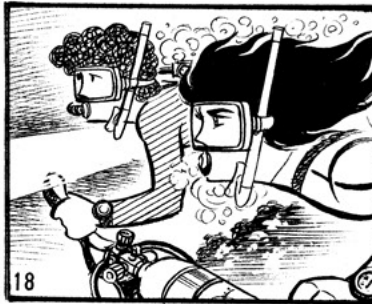
先輩

もう
かえり
ましようよ

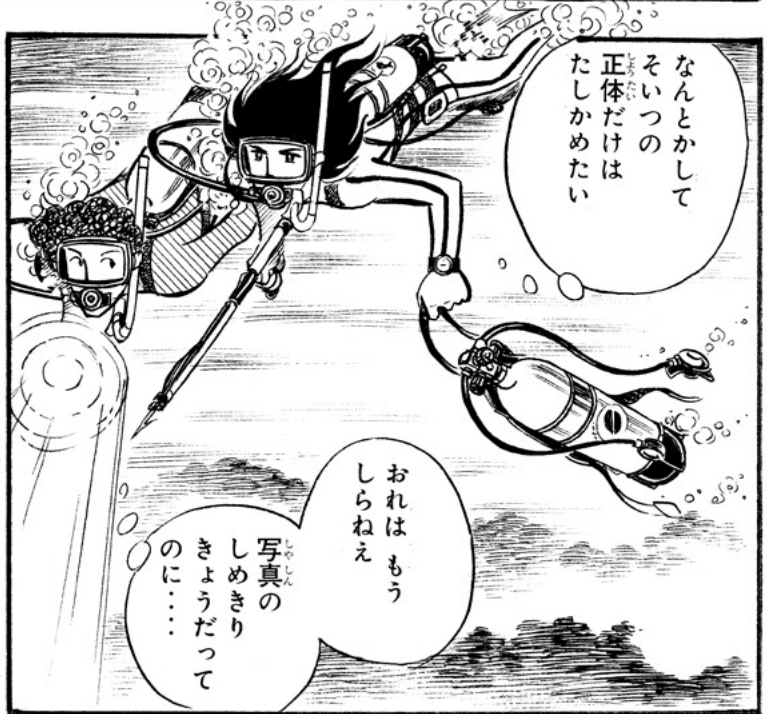


あれが
何者のしわざに
よるものか
おれにも
わからん...が

海の生物
—
それもよほどの
幸運にでも
みまわれなきや
お目にかかれな
やつって
可能性もあるんだ



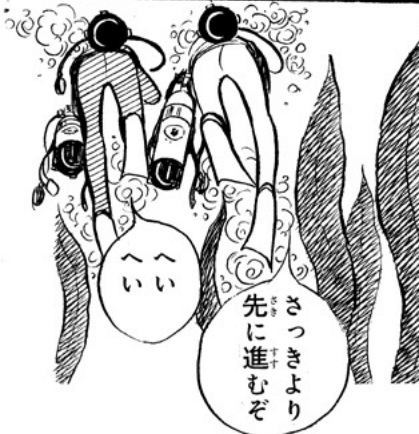
18



なんとかして
そいつの
正体だけは
たしかめたい

おれはもう
しらねえ

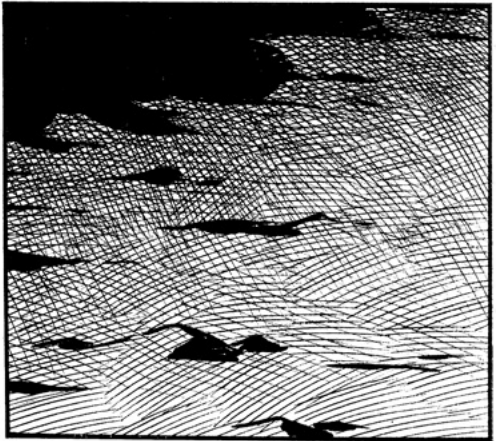
写真の
しめきり
きょうだつて
のに...



さつきより
先に進むぞ



ン？
急に水温が
さがったぞ



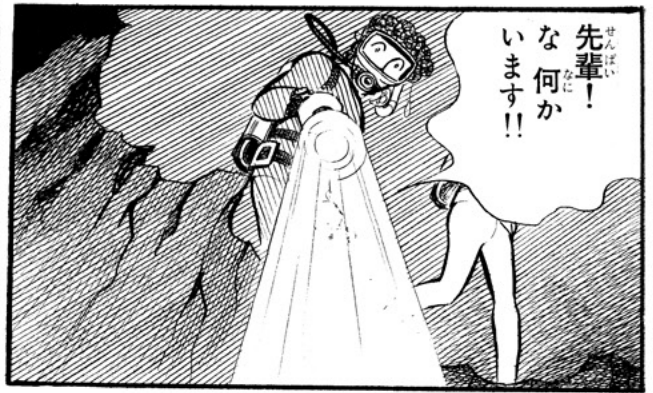
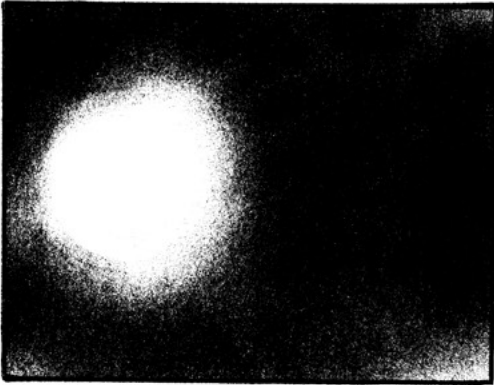
かなり
深そう
だな…

どうやら
ここだけ
水温が低く
なってるらしい

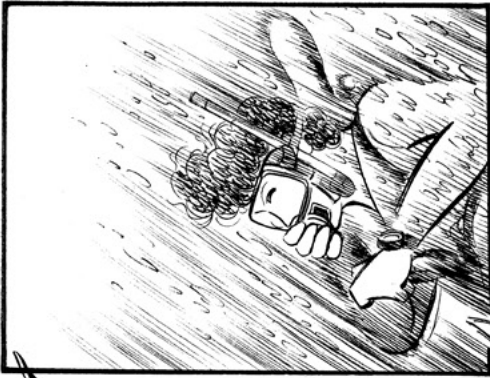
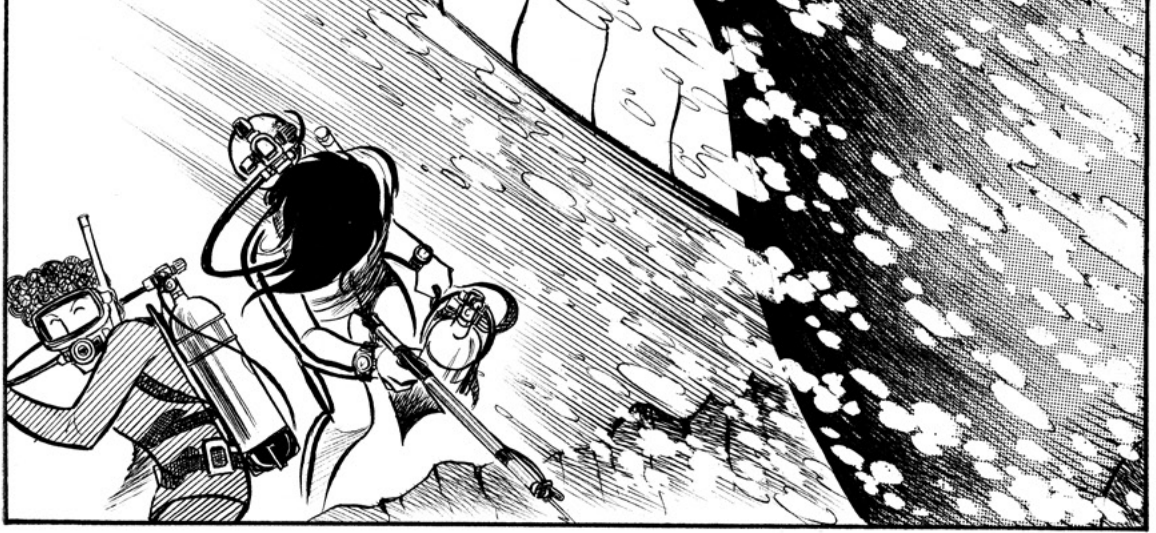


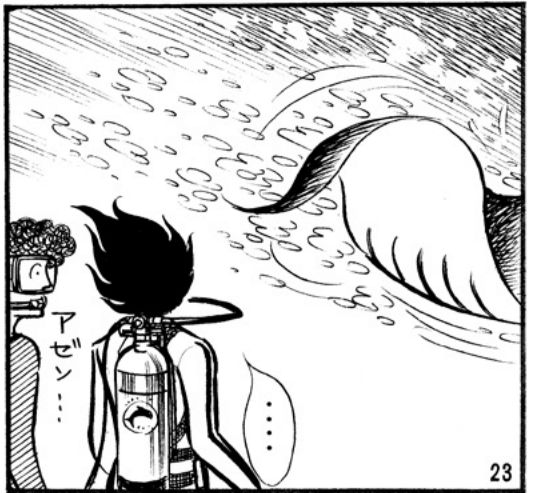
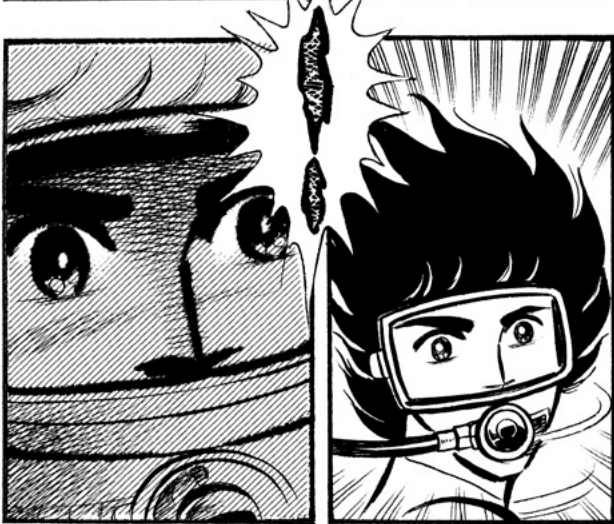
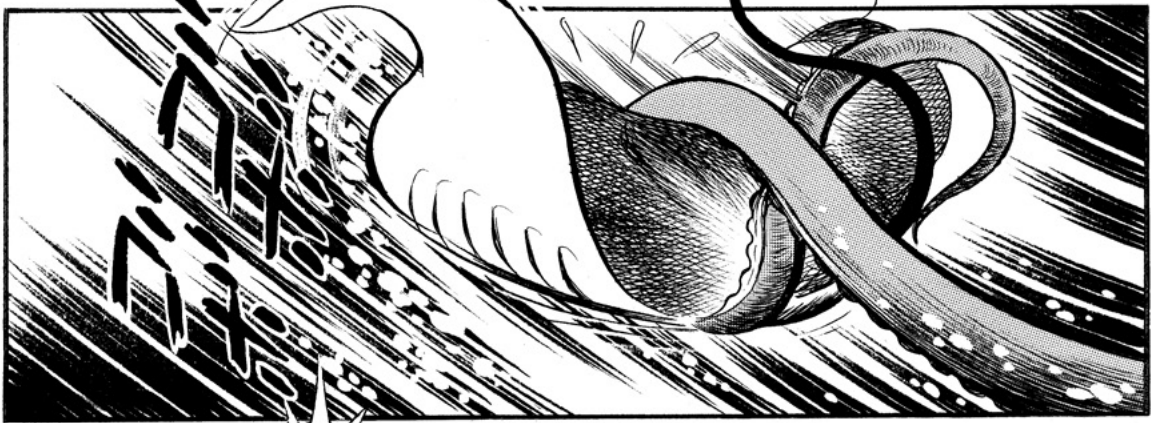
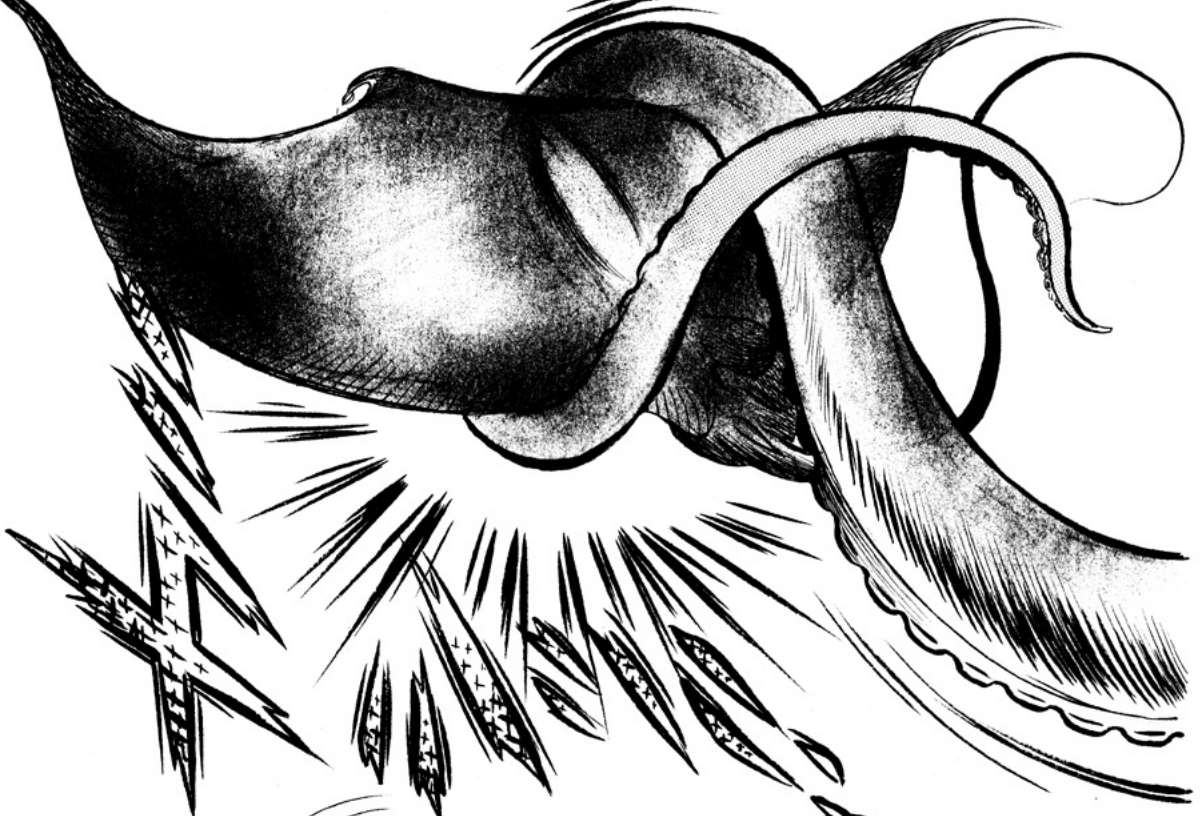
あれ？
こんな所に
裂けめがある！

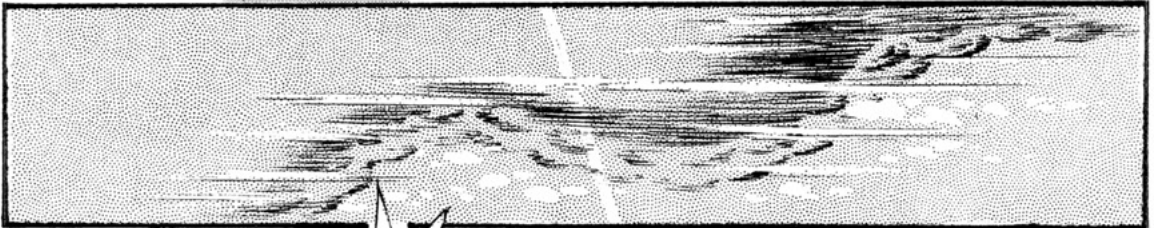
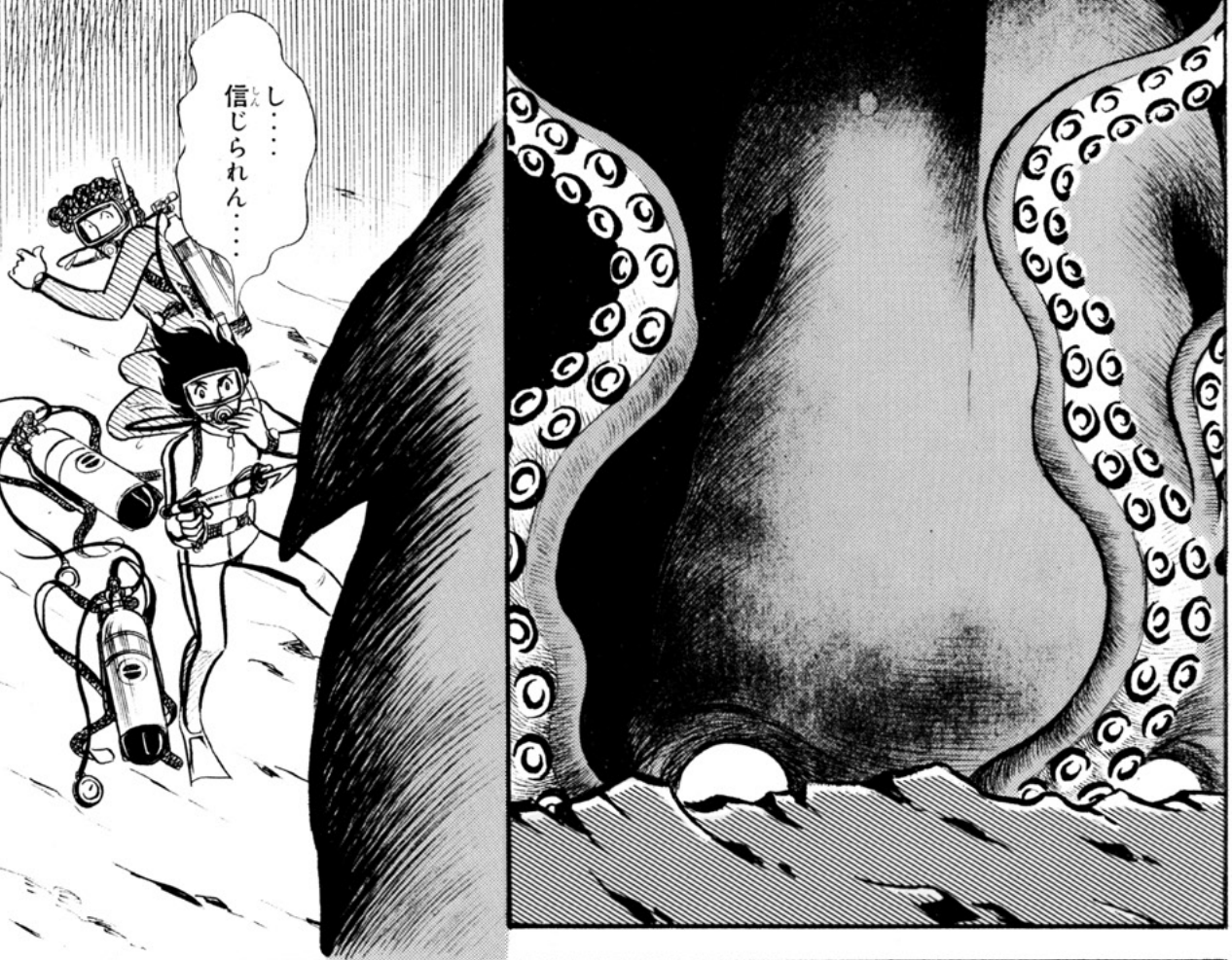
ううっ
いやに
つめてえ

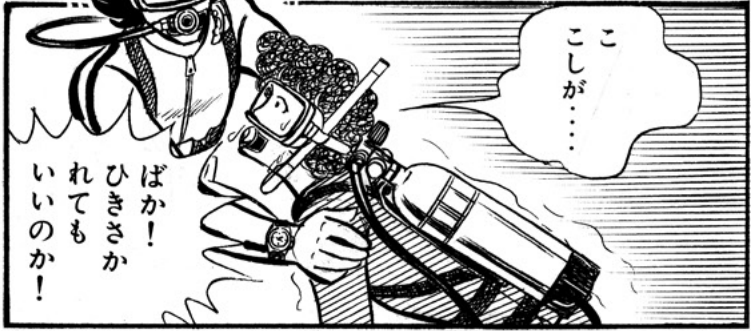
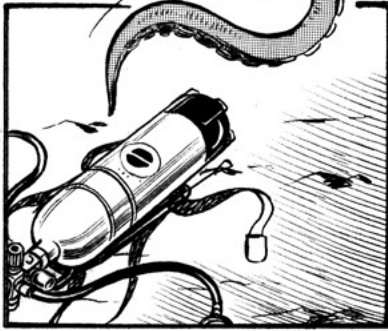










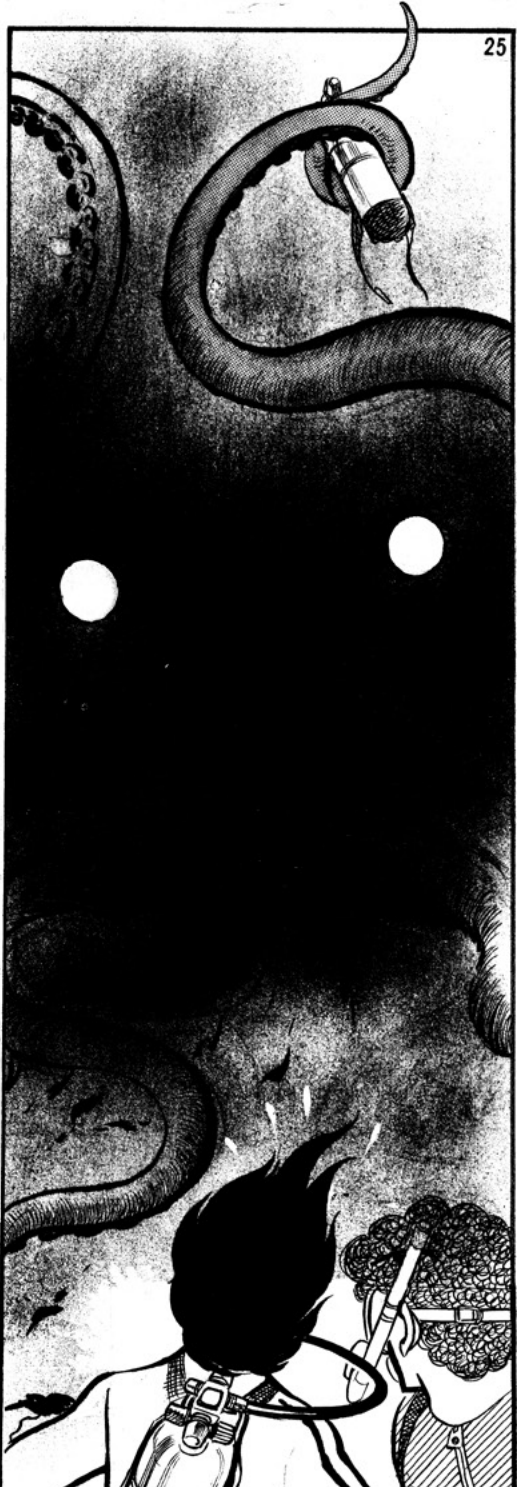


ばか！
ひきさか
れても
いいのか！

こ
しが
……



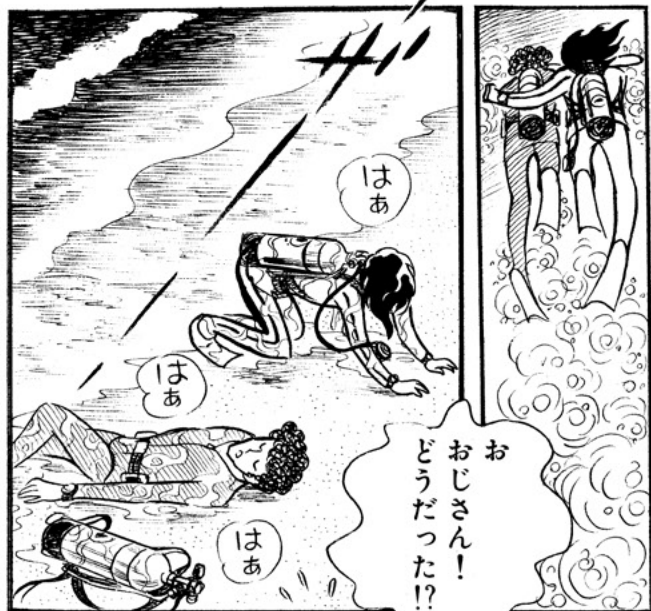
カッパッパッ!!



六!
いまのうちだ

す
す
ん
ま
せ
ん







先輩
あとは
この人たちに
まかせて
ひきあげ
ましょ

ばか
いえ!



その大イカを
ころすんじや
そうじや
そうじや!

魚が少なく
なったのも
そいつの
せいじやろ



うちの
娘は...



でも...
おれまだ
くたばり
たくは...



あんな
絶好の被写体を
目のまえにして
おめおめ
かえられるか



そうだ!
うまくいけば
あれが
つかえるかも...

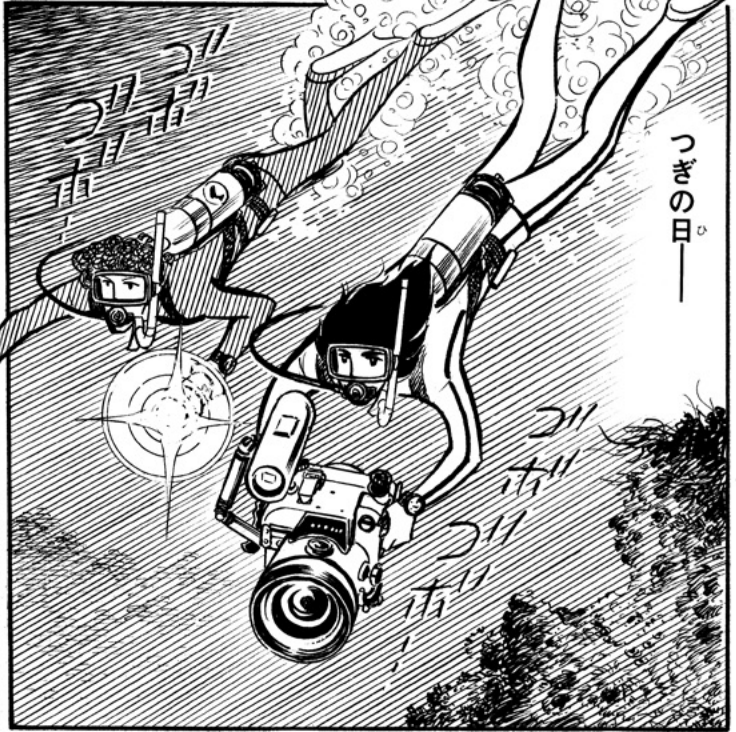


でも...

何か方法は
あるさ...



おれだって
まっぴらさ
だが相手の正体は
わかつたんだ





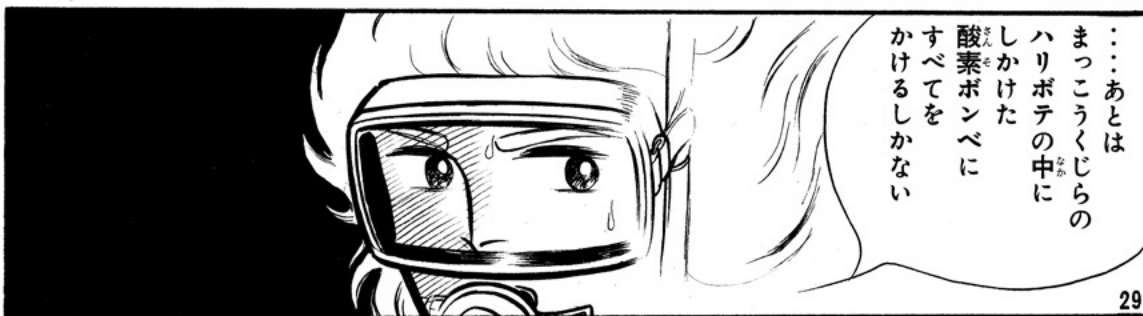
イカには
光るものに
強い興味をしめす
くせがある

必ず
このライトの光に
さそわれて
でってくる!



まっこうくじらは
やつしやうていの宿敵だ
姿をみつけたら
必ず攻撃を
しかけるはずだ

そんな
もんさ
かねえ



…あとは
まっこうくじらの
ハリボテの中なかに
しかけた
酸素ボンベに
すべてを
かけるしかない



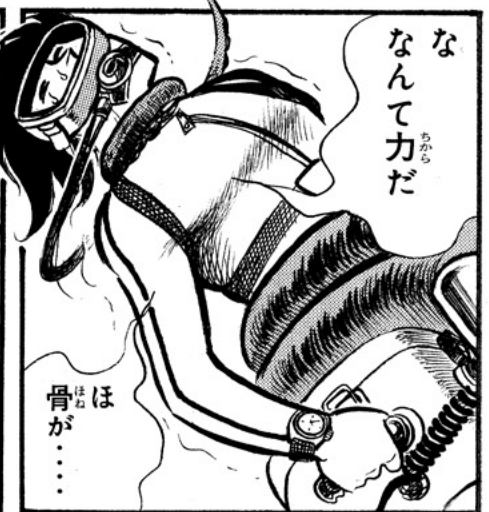
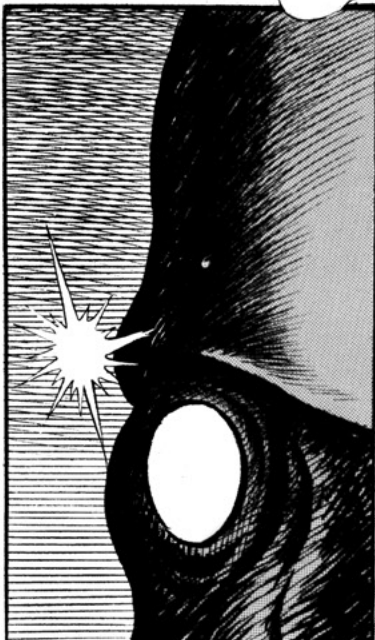
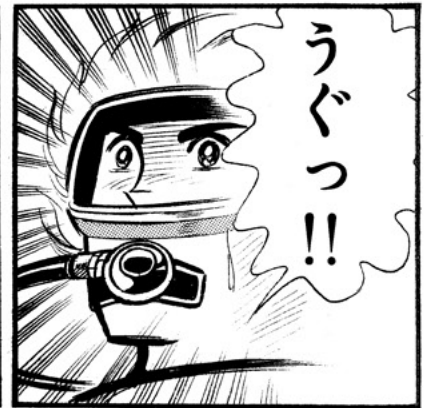
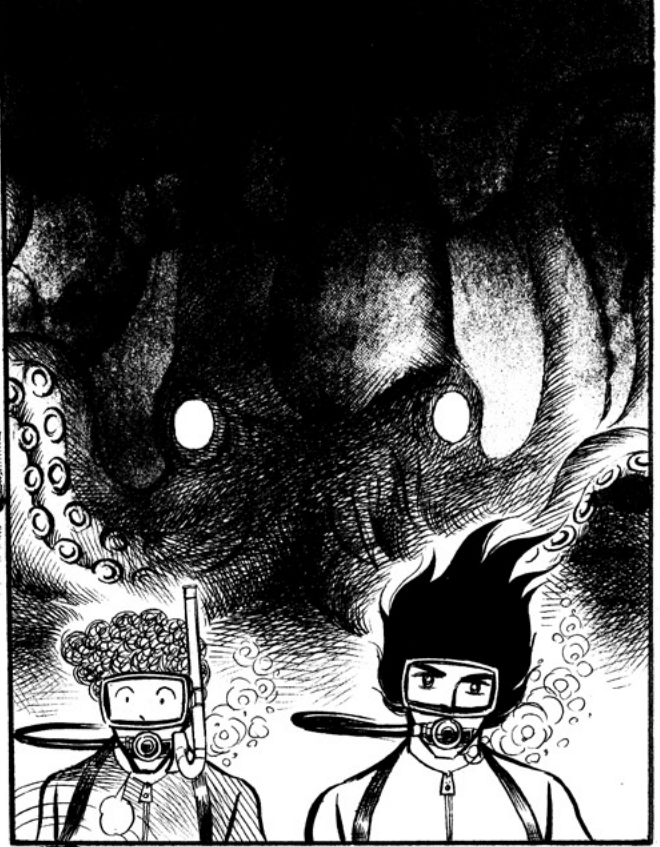
ひよっとしたら
すごい写真が
とれるかも
しれないぞ…

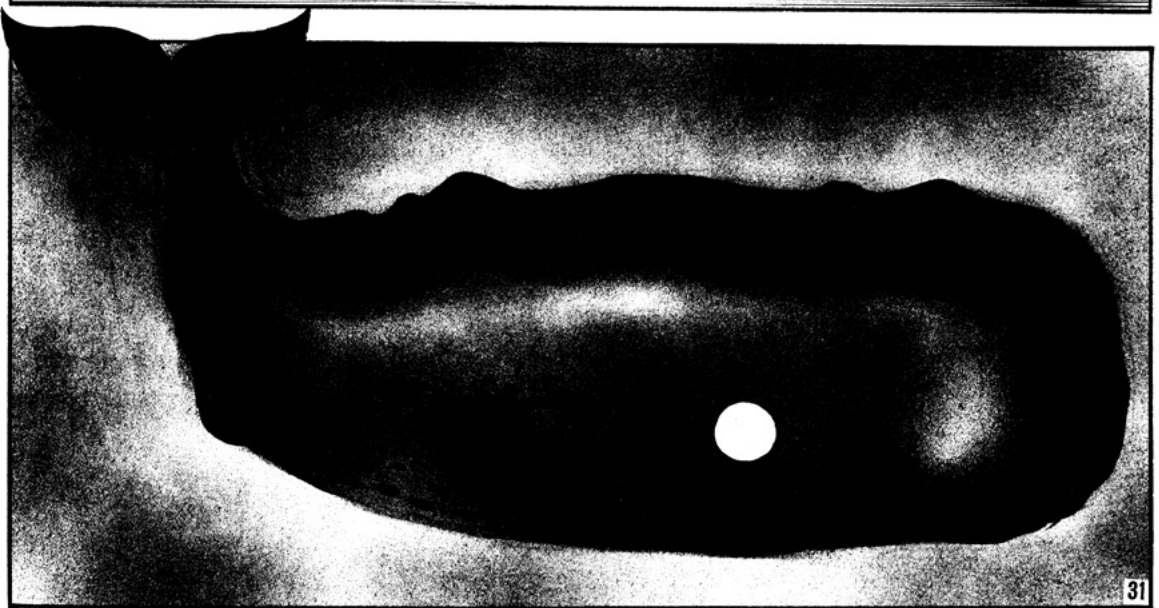


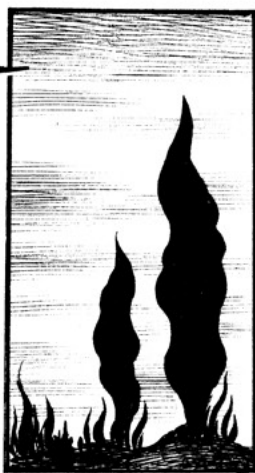
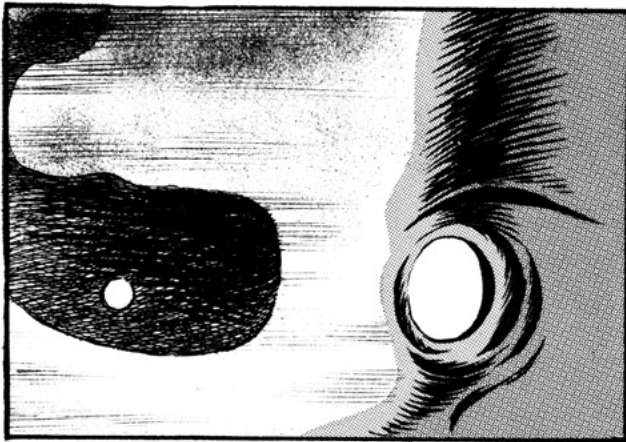
こんな
チャンスは
めったにない

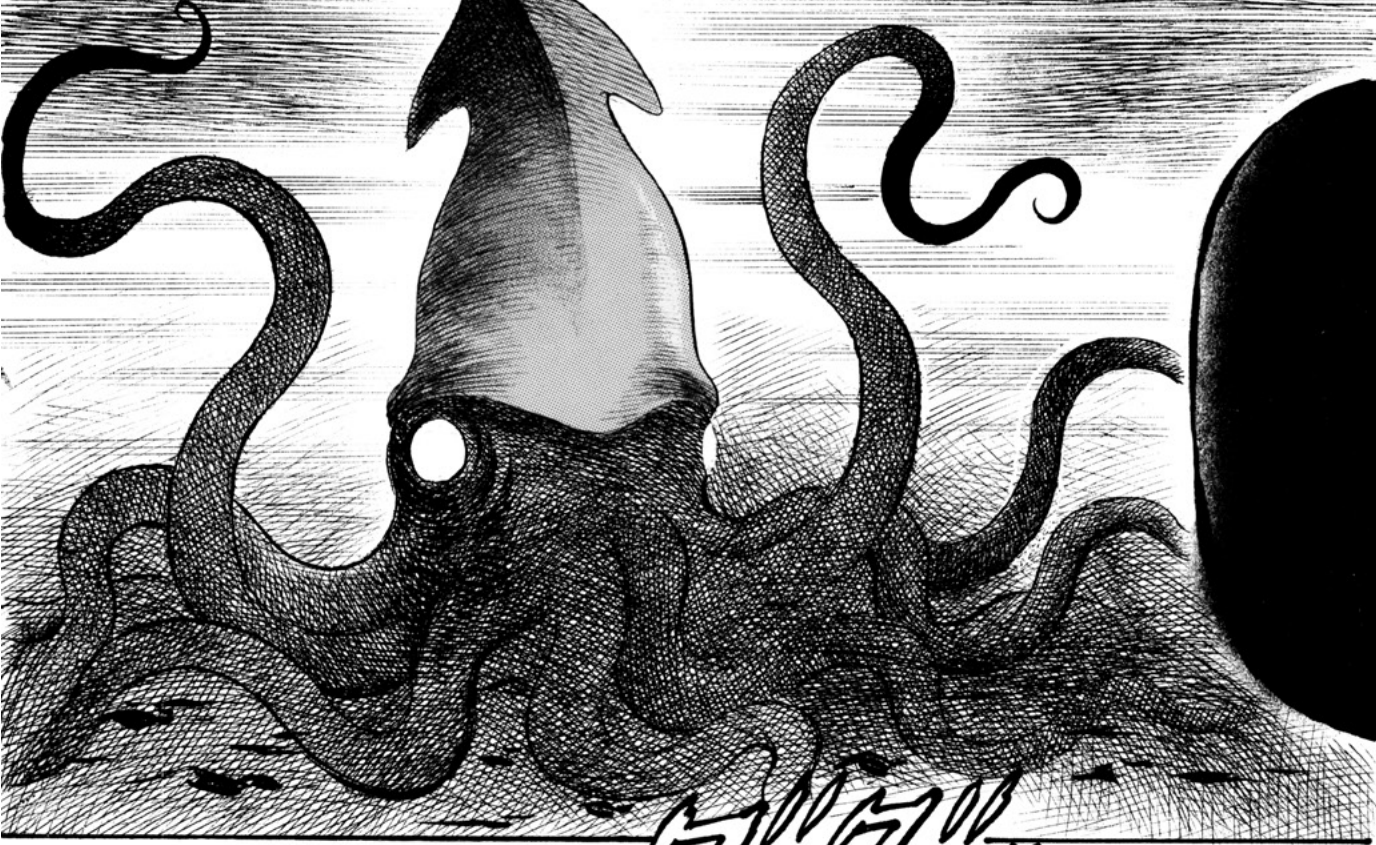


どうせなら
早いとこ
でてほしいスね
ブルブル…





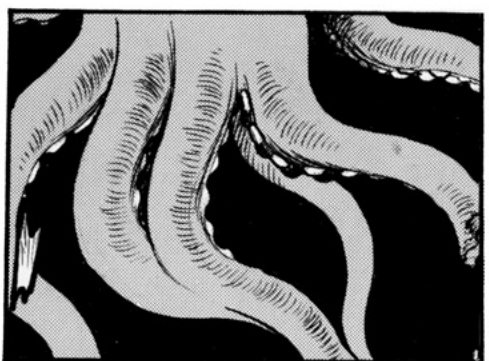
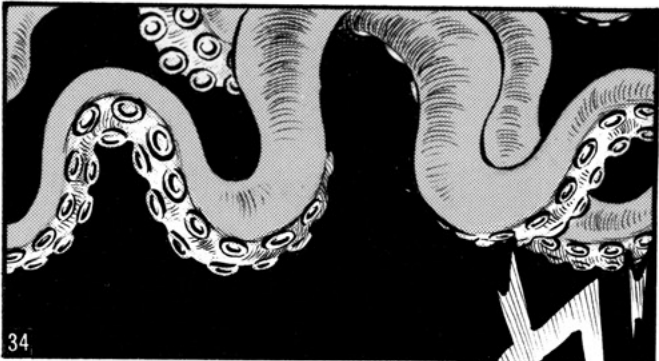
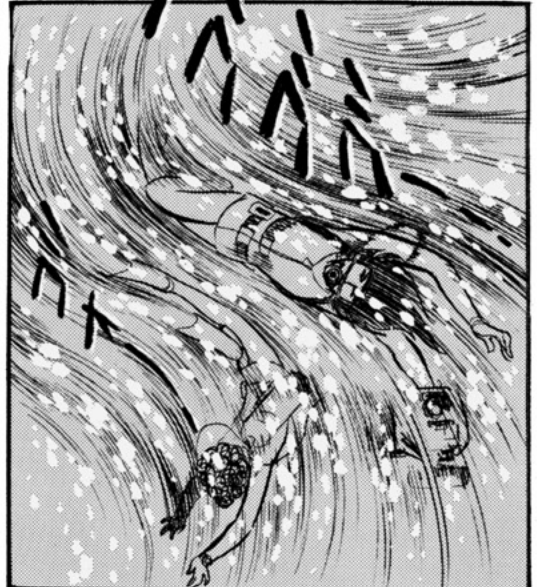
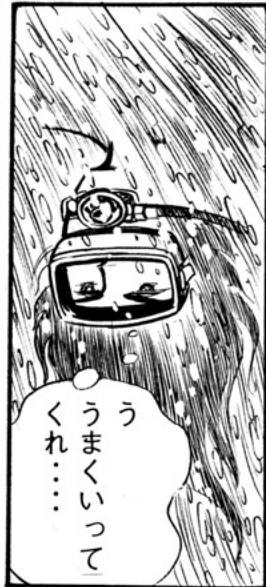


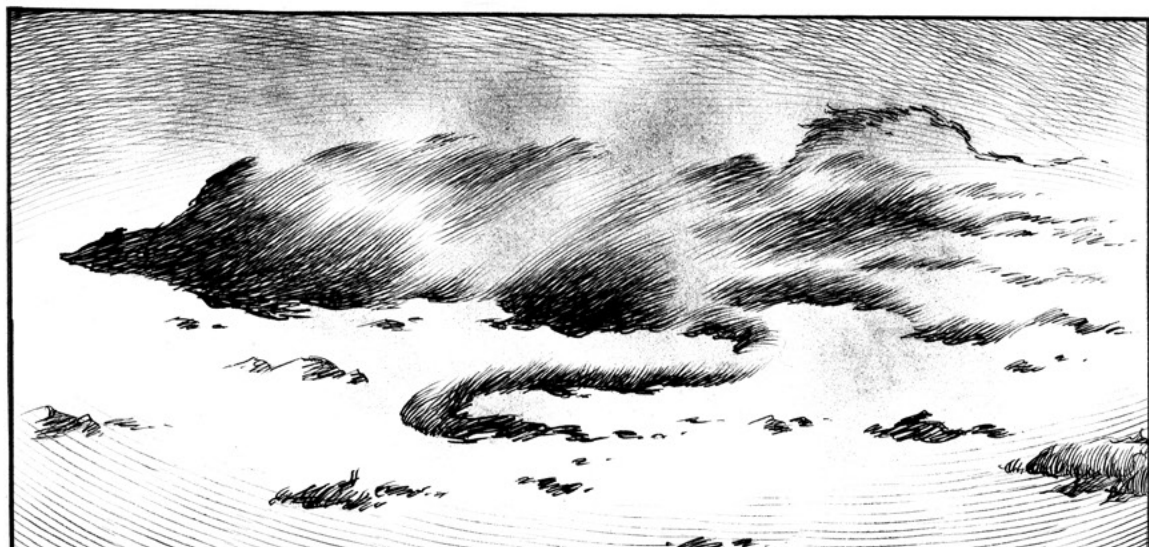
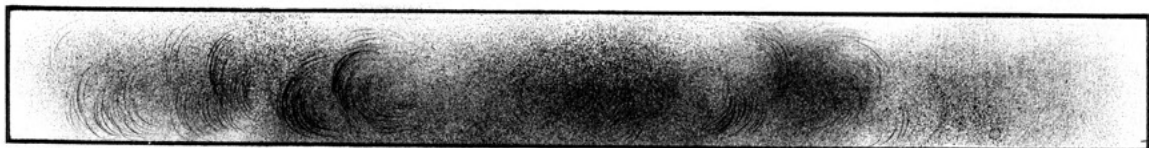
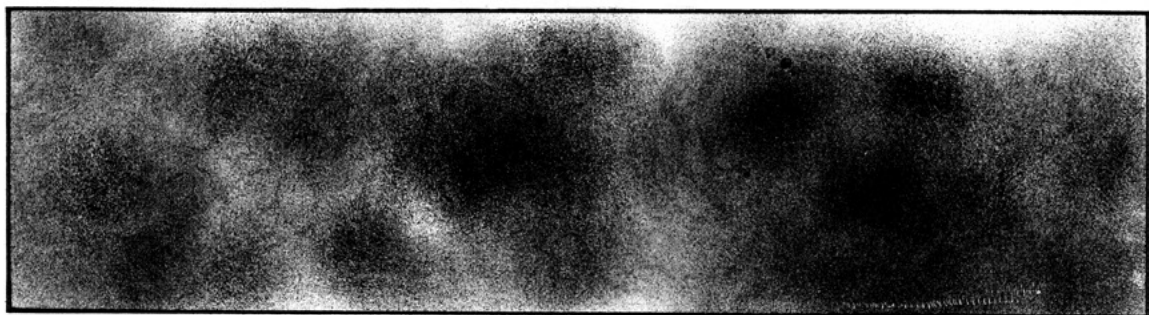


うわああ
~~~~~!!

ひた











カ  
ア  
ア

